

# ちよよごころ話

## 第二四九 善覺の年忌

今月は先代善覺老師の十三回忌の法要が十九日に厳修ごんしゆされます。「一死いっし一生いっしょう乃ち交情こうじやうを知り、一貧いっぴん一富いっふ乃ち交態こうたゐを知り、一貴いっき一賤いっせん交情こうじやう乃ち見わる。」とあります、説明すると「人の交情は、その人の生死せいじ、貧富ひんふ・貴賤きせんなどの変化によつて、移り変わるものだ。」と、有り難いことに、当山の檀信徒の皆様は先代亡き後も愚僧ぐそうにお付き合いを頂き、寺門の行事等々に、ご参加、お力添えを頂き、当山の運営に支障をきたすこと無く、今までやってこれました。感謝しかございません。先代善覺上人の遺跡ゆいせきは善入院ぜんにゅういんにあり、「骨を埋めるも、名を埋めず」、の金言通り、お名前は永久に善入院に残ります。故に、年回供養には広く多くの方々に焼香賜りたいと、思うのです。焼香して善覺上人のパワーを頂いて下さい。「一字の師」と言う言葉があります。どんな些細ささいな事でも教えてくれた人はみな自分の師である。と、我等には所謂謙虚な姿勢が求められます。前にも書きましたが、吉川英治氏は「我以外はみな我が師」と言ってみえます。他から学ぶべき事が沢山あるからです。道心とは仏教的には仏果を得ようとする心ですが最澄は「道、人を弘め、人、道を弘む、道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし」と、言ってみえます。道心が国家安泰のために必要であると言ってみえるのでしょうか。衣食とは生活を指します。伝教大師（最澄）は心の作用を第一としている訳です。宮林昭彦教授訳の梵網經・十重禁戒には「快意殺生戒（生命のあるものを殺害すること）盗劫人者戒（他人の者を盗むこと）無慈行欲戒（慈しむ心なくみだらな行為をすること）故心忘語戒（故意にうそをつくこと）自讚殷他戒（自分をほめて他人をそしること）……殷謗三宝戒（仏・法・僧の三宝をそしること）」の十戒があります。徳の道行きに「六行」があります。六行とは孝・友・睦・婣・任・恤・恤・です。言わんとすることは、父母に孝・兄弟に友・親戚に睦び・外戚に仲良く・朋友に信任し・貧者に恤みをたれる事とあります。明治天皇も勅語の中で「父母に孝、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ恭儉己を持し、博愛衆に及ぼし、学を修め、業を習い、以つて智能を啓発し、徳器を成就し、進んで公益を広め……」と説明せり。国家も各家庭を元として国の存在がある訳で、国運が衰退すれば、自然に家庭も崩壊してしまいます。

今現在に於いて新卒の内定取り消しが昨年の約六倍、解雇が約六万七千人出ているそうです。今後就職難民が約七十万人もでるそうです。コロナの影響もここまで来ると大変なことです。食生活を守る事が出来なければ、「武士は食わねど高楊枝」、なんてキレイゴトではすまされません。家族がいればなおさらです。最澄さんや明治天皇には申し訳ないことですが、治安の乱れも否めません。故事に「戦々兢々として、深淵しんえんに臨むが如く、薄氷はくひやうを履むが如し」、とあります様に。世情が不安定な時でも、慎重な行動を期待したいものです。政府はどのようにしたら万民が路頭に迷わず、生活できるかを考え政策を練るのが仕事であろう。金利政策やゴー・ツーを含め、それで善哉です。多くの失業者が出るようでは失敗と言わざるを得ません。政ごとは民の為にありと考えるのが普通ではなからうか。深々

令和二年十一月一日

善 徳 齋